

---

# 七つの魔法

立花 美咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七つの魔法

### 【Nコード】

N0440J

### 【作者名】

立花 美咲

### 【あらすじ】

有名なパパ・ママのいる家庭の家に生まれた美優。

しかし、美優のおおばさまは魔法使いらしい。

美優は魔法使いのおおばさまと会って話をし、魔法使いにならないか？って聞かれる。

魔法使いになる決心をした美優の魔法使いストーリー。

## ブローグ

はじめまして!!

私の名前は、「森宮 美優」

将来は、歌手や女優などの有名人になりたいんだ!!

あ、ついでにママは有名な小説家。パパは有名な会社の社長。  
私もパパ・ママを見習って、有名な人になりたいんだ!!

そう思っていたら、急に部屋の外からパパの声が。

「美優、入るぞ」

深刻そうなパパの声。

「うん、いいよ」

私はそんな雰囲気を吹っ飛ばすかのように、明るい声で言った

ガチャ・・・

パパが入ってきた。

「急にどうしたの??」

私が聞くとパパが

「今日、大おばさまがうちにくる。なんでも、美優に話があるらしい」

って言った。

大おばさまは、なんでも不老不死とか何とかで魔法使いらしい。

そんなの嘘って思ってたけど、今はもう100年も生きていますらしい。

だから私たちの家庭では、すっごく有名っていうか・・・偉い人

して慕<sup>した</sup>われるようになった。

「大おばさまが！？私<sup>わたし</sup>に！？わかった。なら、到着<sup>とうちやく</sup>を待<sup>ま</sup>ってます」  
私<sup>わたし</sup>はそう、パパに言<sup>い</sup>った。

パパは

「ああ、くるのを待<sup>ま</sup>つとけよ。失礼<sup>しつれい</sup>のないようにな」  
そういつて部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>を出<sup>で</sup>た。

私<sup>わたし</sup>も大おばさまに会<sup>あ</sup>うのは初<sup>はじ</sup>めて！  
緊張<sup>きんちょう</sup>・不安<sup>ふあん</sup>・楽<sup>たの</sup>しみな気持<sup>きもち</sup>ちがいっぺんにのしかかってくる。

すっごく不思議<sup>ふしぎ</sup>な気分<sup>きぶん</sup>。

早く<sup>はや</sup>あつてみたいな〜  
♪

## 第一話 大おばさまと対面

私は美優。

今、大おばさまが来るのを心はずませながら待ってます！！

お話って何だろう？

私は自分の部屋を行ったり来たり。  
パパに

「落ち着け！！」  
って怒られた。

でも、すつごく偉い方に会えるのに、落ち着けるわけないよ！  
私は一時間、ずっとウロウロしながら待っていた。

一時間後

「ピ~~~~ンポ~~~~ン」  
家のチャイムがなった。

私は急いで玄関まで走っていった。

ガチャ

ドアを開けるとソコには見たこともないような美しい女性が立っていた。

「・・・どちらサマですか？」

私が、おそろおそろ聞くと、後ろからパパが

「コラ！美優、大おばさまに失礼だろ！！」

って怒ってきた。

「ええ!!」

私はつい、大きな声をだしてしまった。

「お・・・大おばさまですか!?!は、はじめまして!!!!」

私は、ペコツつとお辞儀した。

「あらあら、かわいくて元気な子。この仔、私が求めてた子そっくりね」

って言って、笑った。

求めていた子・・・?

私はそのとき、その言葉の意味が理解できなかった。

「求めていた子って・・・?」

そう聞こうとしたら、後ろからママが

「あら!!大おばさまっ お久しぶりですっ」  
って挨拶してた。

ママがこんなにはしゃぐような姿になるの、生まれてはじめてみた。

すると、ママが

「ここで話しても、寒いですからどうぞ、中へ」

そう言って大おばさまを部屋の中に招き入れた。

入ると同時に、大おばさまが

「美優ちゃんとお話がしたいわ。美優ちゃんの部屋はどこ?」  
って聞いてきた。

いきなり!?

私はそう思ったけど、「あ、コチラです」って言って大おばさまを  
ご案内した。

とうとう、大おばさまの「話」って言うのを聞けるんだ！

## 第二話 大おばさまの話

私は美優。今、大おばさまの前を歩いてます！！  
お部屋にあんないするために・・・

「こちらです」

私はあるドアの前で立ち止まった。大おばさまも顔を上げた。

「あらあら、きれいなドアね。部屋の中はキレイなのかしら？」

大おばあさまは顔をほころばせてそういった。

「お部屋は、まあまあだと思います。片付けるの、好きなので  
私は何気に自分の長所をアピール。」

「いいことね。では、入りますね」

大おばさまはそういうと「ガチャ」。  
ドアを開けた。

その瞬間、大おばさまが声を上げた。

「あらまゝ。すっごくキレイな所ね。ここなら話しやすいわゝ」  
って喜んでいた。

（よかった・・・）

私は「ホッ」と胸をなでおろした。

「あ、ソコのソファにお座りください」  
私はソファを指差した。

「あら、どうも。んじゃ、そろそろ用件を言いますね」

大おばさまはさっきとはまったく違う真剣な顔。

「はい・・・」

私も、その雰囲気飲み込まれそう。

「あのね、私の話って言うのは、あなたを私の弟子にしたいの  
はい？弟子・・・ですか？

私はちよつと頭の上にハテナが浮かんだ。

「私が、魔法使いだったって言うのは知ってるわよね？」

「あ、はい」

「だから、あなたも私と同じように、魔法使いになってほしいの」

「それが何故私なんですか？？」

「それはね、あなたのパパもママも魔法に関してのオーラがまったく見えないの。でもね、美優には魔法使いになれるようなオーラがあるの。お願い」

大おばさまはすつごく真剣に私の前で手を合わせた。

私は「わかりました」と一言言っつてうなずいた。

「ありがとう」

大おばさまは目に涙。私は、これでよかったって心からそう思った。

「ではさつそく、うちの家ですむことになるわよ」  
って言った。

「学校は・・・？」

「行くわよ。学校から帰ったら即、魔法レッスンよ。ちよつと大変かもしれないけど、ガンバって」

大おばさまはそう言っつて笑った。

すつごくうれしそう。もしかしたら大おばさまは今ままで1人だったのかもしれない。

私が居ることなんだか1人じゃないような気がしてうれしいのか

もしれない。

私はさっそく荷物をまとめ始めた。

これからの未知の生活に心を弾ませながら・・・

### 第三話 いざ！大おばさまの家へ！！

私、美優。

今日から大おばさまの家で暮らすことになりました！！

今日はまだ行かないけど、明日の早朝から出発。

魔法使いの家だから、森とかの中にあるとか不思議な家なのかな

って思ってる。

コンコン

部屋のノックの音。

「なぐにぐ？」

私は部屋の中から返事した。

「パパだ。入るぞ」

「うん、いいよ」

私はパパを部屋に招き入れた。

「急にどうしたの？」

私はパパに問いかけた。そしたらパパは

「大おばさまに迷惑かけないようにな。あんまり無理はさせないよ  
うに」

パパは、すっごく真剣な顔でそういった。

「？」

私は何故ソコまでパパが真剣になるのかわからなかった。

・・・が

「うん、気をつける」

ってパパと約束した。

そして、パパが部屋を出て行った後、すぐに寝た。  
明日は早いしね・・・

・・・次の日・・・

「おはようございます」

きちつと仕度をして、大おばさまが来るなり、挨拶した。

「あらあら。もう準備ができてるの？早いわね。なら早速行きましよう」

大おばさまはそういうと「カチッ」って何かを鳴らした。

その瞬間「ぼんっ」って音がして、ほうきが現れた！！

「すっごく~~~~い！」

私は目をきらきらさせて、ほうきを見た。

「いつか美優もできるようになるんだから。ガンバリなさいよ」  
大おばさまはそういった。

そうか・・・私も・・・こんな風に魔法が使えるようになるんだ！！  
私はそう思うとすぐにレッスンをしたい！って思った。

「大おばさま」そろそろ行きましようよ」

私は駄々っ子みたいに大おばさまに言った。

「あら、本当ね。行きましよう」

「いざ！大おばさまの家へ！！！」

## 第四話 大おばさまの家

「大丈夫？ちゃんとつかまってね」

私は美優。今から私は、大おばさまの家に引っ越すことになりました。

「大丈夫です」

緊張気味に答える私を見て、「フッフ」って笑う大おばさま。

「さ、いきますよ」

私は大おばさまの魔法のほうきに乗って空たかくに舞いあがった。

「すつご~~~~い!!」

歓声を上げる私。

「ほほ、いつかあなたもこんな風に自由自在にほうきを使うことができるのよ。」

大おばさまはそういった。

そうか・・・私もこんな風になるときがくるんだ。

・・・それにしても

「大おばさま？家、遠くないですか？」

「ええ、だって県外ですもの」

「えええ！だったら学校は!？」

「瞬間移動すればいい話よ。今日はトクベツ、ほうきですけどね。」  
「.....」

「だから今日は瞬間移動魔法ができるようになってもらいます」  
大おばさまはイキナリすぎる。

「わかりました」

少し不安になりながらも私は返事をする。

「ささ、見えてきましたよ。私の家が・・・」

私は、大おばさまがそういったから顔を上げた。

「え・・・？」

そこには見たこともないような大きなお城があった。

「すごい・・・大きな家」

私がそういうと同時にほうきはじょじょにスピードをゆるめ、地面に近くなっていった。

「さ、つきましたよ。降りて」

私は、言われたとおりにした。

「ここが私の家、マリア邸」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0440j/>

---

七つの魔法

2010年10月9日12時10分発行